

# オバマ大統領のカイロ大学での講演 「新たな始まり」

2009年6月4日



米務省国際情報プログラム局



\* 下記の日本語文書は参考のための仮翻訳で、正文は英文です。

どうもありがとうございます。こんにちは。この時を超えた都市カイロを訪れ、2つの素晴らしい教育機関の主催でここで話しさせていただくことは、私にとって名誉なことです。アルアズハル大学は、過去1000年以上にわたり、イスラムの学問を主導してきました。また、カイロ大学は、100年以上にわたり、エジプトの進歩の原動力となってきました。そして、共に、伝統と進歩の調和を体現しています。私は、皆さんの温かい歓迎、そしてエジプト国民の皆さんの温かい歓迎に感謝します。また私は、米国民の親善の気持ちと、米国内のイスラム社会からの平和を祈るあいさつの言葉をお伝えすることを誇りに思います。アッサラーム・アライクム—あなた方の上に平和がありますように。

私たちは、世界各地で米国とイスラム教徒の間の緊張関係が大いに高まっている時期に、ここに集まっています。この緊張関係は、現在のいかなる政治論争をも超えた、歴史的な理由に根差すものです。イスラムと西洋の関係には、何世紀にもわたる共存と協力の歴史がありますが、対立と宗教戦争の歴史もあります。最近では、多くのイスラム教徒の権利と機会を否定した植民地主義によって、また、冷戦時代に、イスラム教徒が多数を占める国々が、自らの願望にか

かわらず、往々にして代理国として扱われたことによって、こうした緊張関係が高まってきました。さらに、近代化とグローバル化がもたらした劇的な変化によって、多くのイスラム教徒が、西洋社会をイスラムの伝統に敵対するものと見なすようになりました。

小規模ながら影響力を持つイスラム少数派の暴力的な過激派が、こうした緊張を利用してきました。2001年9月11日の同時多発テロと、こうした過激派による一般市民を標的にした継続的な暴力行為により、一部の米国民は、イスラムを、米国と西洋諸国だけでなく人権にも敵対するものである、と考えるようになってきました。こうした状況がさらに大きな恐怖と不信を生んでいます。

私たちの関係が、両者の相違点によって定義されている限り、私たちは、平和ではなく憎しみの種をまく人々、私たち全員が正義と繁栄を実現するために役立つ協力より、対立を推進する人々に力を与えることとなります。このような疑惑と不和のサイクルを断ち切らなければなりません。

私は、米国と、世界中のイスラム教徒の間の新たな始ま

りを求めて、ここカイロへやってきました。それは、相互の利益と尊敬に基づき、米国とイスラムは相いれないものでも、競合するものでもないという真実に基づく新たな始まりです。米国とイスラムは、重なり合うものであり、正義と前進、寛容と全人類の尊厳という原則を共有しています。

しかし、変化が一夜にして起きるものではないことは、私も認識しています。この演説が大きな話題となっていることは承知していますが、長年の不信を1回の演説で払拭することはできません。また、本日与えられた時間の中で、私たちを現在の状況に至らしめた複雑な問題にすべて答えることもできません。しかし、前進するためには、私たちが心の中に秘めている、あまり公に口にすることがない本音を、お互いに率直に語るなければならない、と私は確信しています。お互いに耳を傾け、相手から学び、お互いに尊重し合い、合意点を探す努力を続けなければなりません。コーランは、「神を意識し、常に真実を語れ」と教えています。私も今日、そのように努力するつもりです。私たちの目の前の課題を謙虚に受け止め、私たちが人類として共有する利害は、私たちを分断する力よりはるかに強いという確信を持って、私はできる限り真実を語るつもりです。

私のこうした確信は、ひとつには私自身の体験に根差しています。私はキリスト教徒ですが、私の父はケニア人であり、その一族には何世代にもわたってイスラム教徒がいます。また、少年時代には、数年間インドネシアに住み、夜明けと夕暮れにアザーンを聞いて育ちました。青年時代には、シカゴの中でも、イスラム教の信仰に尊厳と安らぎを見出す人たちが大勢いる地域で働いていました。

また、歴史を学んだ者として、私は、文明がイスラム教に負うところが大きいことも理解しています。アルアズハルのような場所で、何世紀にもわたって学問の光を継承し、ヨーロッパのルネサンスや啓蒙(けいもう)主義への道を切り開いてきたのは、イスラム教でした。代数学を発達させ、磁気コンパスなどの航海用具を開発し、ペンや印刷術を発達させ、病気のまん延と治療に対する理解を深めさせたのは、イスラムの社会における技術革新でした。イスラム文化は、壮大なアーチと天高くそびえる尖塔、不朽の詩と人々に愛される音楽、優雅なカリグラフィと穏やかな思索の場所を、私たちに与えてくれました。そして、歴史を通じて、イスラム教は、言葉と行動により、宗教的寛容と人種間の平等の可能性を実証してきました。

また私は、イスラムが常に米国の歴史の一部となってきたことも承知しています。米国を最初に承認した国家は、モロッコでした。1796年にトリポリ条約に署名するに当たり、第2代米国大統領ジョン・アダムズは、「米国には、イスラム教徒の法律、宗教、または平穩に敵対する性質は全くない」

と書いています。そして、建国以来、米国のイスラム教徒は、米国を豊かにしてきました。彼らは、戦争で戦い、米国の政府で働き、公民権を支持し、起業し、大学で教え、スポーツで活躍し、ノーベル賞を受賞し、米国で最も高い建物を建て、オリンピックの聖火を灯してきました。そして最近、米国で初めてイスラム系米国人が連邦議員に選出され、建国の父の1人であるトーマス・ジェファソンが書斎に置いていたコーランを使って、米国の憲法を守ることを誓いました。

ですから私は、イスラム教発祥の地であるこの地域に来る前に、3つの大陸におけるイスラム教というのを知っていました。こうした経験から、私は、米国とイスラムとのパートナーシップは、イスラムに対する誤った観念ではなく、イスラムの実態に基づくべきである、と確信しています。そして、イスラムに対する否定的な固定観念が発生したならば必ずそれと戦うことを、米国大統領としての責務のひとつ



と考えています。

しかし、その原則は、イスラム教徒の米国に対する認識にも適用されなければなりません。イスラム教徒に大ざっぱな固定観念を当てはめることができないように、米国にも、利己的な帝国という大ざっぱな固定観念を当てはめることはできません。米国は、世界有数の進歩の源となってきました。米国は、帝国に対する革命から生まれました。すべての人間は平等につくられているという理想の上に建てられた国であり、何世紀にもわたり、米国内で、また世界各地で、この言葉に意味を持たせるために、血を流して努力してきました。私たちは、あらゆる文化によって形成され、地球の隅々から集まり、ひとつの簡潔な概念、すなわち「エ・プルリブス・ウナム(多くからつくられたひとつ)」という概念のために尽くしています。

さて、バラク・フセイン・オバマという名前のアフリカ系米国人が大統領に選出された、という事実が大きな話題になっています。しかし、私の個人的な経歴は、それほど珍しい

—言葉だけでは、国民の要求に応えることはできません。そして、こうした要求に応えるには、今後何年かにわたり大胆に行動する、そして私たちが共通の課題に直面しており、その課題に対処しなければ私たちの誰もが悪影響を受けることを理解するしかありません。

ものではありません。あらゆる人々に機会を与えるという夢は、米国にいるすべての人間にかなえられたわけではありませんが、米国にやってくる誰もが、それを期待することができます。その中には、700万人近い米国のイスラム教徒も含まれており、ちなみに彼らの収入と教育水準は、米国民の平均を上回っています。

そして、米国における自由は、信教の自由と切り離すことができません。米国の各州にモスクがあり、国内には1200を超えるモスクが存在するのはそのためです。米国政府が、女性や少女のヒジャーブ着用の権利を守り、その権利を否定する者を罰するために訴訟を起こしているのもそのためです。

従ってここではっきり申し上げます。イスラムは米国の一部です。そして、米国では事実として、人種、宗教、あるいは身分にかかわらず、誰もが皆、平和で安全に暮らすこと、教育を受け尊厳を持って仕事をする、私たちの家族と地域社会と神を愛すること、という共通の願望を持っている、と私は信じています。こうした願望を、私たちは共有しています。これは、全人類の希望です。

言うまでもなく、共通の人間性を認識することは、私たちのやるべきことの始まりにすぎません。言葉だけでは、国民の要求に応えることはできません。そして、こうした要求に応えるには、今後何年かにわたり大胆に行動する、そして私たちが共通の課題に直面しており、その課題に対処しなければ私たちの誰もが悪影響を受けることを理解するしかありません。

というのも、私たちは最近の体験から、ある国の金融制度が弱まれば、世界中の繁栄が妨げられることを学びました。1人の人間が新型インフルエンザに感染すれば、すべ

ての人間が感染の危険にさらされます。ひとつの国家が核兵器を追求すれば、すべての国家にとって核攻撃の危険が高まります。暴力的な過激派が山脈の一角で活動すれば、海を越えた場所に住む人々にも危険が及びます。ボスニアやダルフルで罪のない人々が殺りくされれば、それは私たち全員の良心の汚点となります。それが、21世紀においてこの世界を共有するということです。それが、人間として私たちが相互に持つ責任です。

そしてそれは、受け入れることが難しい責任です。なぜなら、人類の歴史は往々にして、国家や部族、そして宗教が、自らの利益を追求するために相手を従属させてきた記録であるからです。しかし、この新しい時代において、こうした姿勢は自滅的です。皆が相互に依存していることを考えると、ひとつの国家またはひとつの集団を他より上位に置く世界秩序は、必ず失敗します。従って、過去をどう評価するかにかかわらず、私たちは過去にとらわれてはなりません。問題にはパートナーシップによって対処し、進歩を共有しなければなりません。

しかしそれは、私たちが緊張の原因を無視すべきだということではありません。むしろその逆で、私たちは緊張に正面から対処しなければなりません。そこで、そうした考え方にに基づき、私たちが今、共に直面すべきいくつかの具体的な課題について、できる限り明確かつ簡潔にお話ししたいと思います。

私たちが立ち向かわなければいけない第1の課題は、あらゆる形態の暴力的過激主義です。

アンカラで私は、米国はイスラムと戦争をしているのではないこと、また今後も決してイスラムと戦争をしないことを明言しました。しかし、米国は、わが国の安全保障に重大

な脅威をもたらす暴力的な過激派には容赦なく立ち向かいます。なぜなら米国は、あらゆる信仰を持つ人たちが拒否すること、すなわち罪のない男女や子どもを殺害することを拒否するからです。そして、大統領としての私の第1の義務は、米国民を守ることです。

アフガニスタンにおける状況は、米国の目標を示すとともに、私たちが協力することの必要性も示しています。今から7年以上前に、米国は、国際社会からの幅広い支持を得て、アルカイダとタリバンを追跡しました。それは私たちが選んだ道ではなく、必要に迫られてのことでした。9月11日の出来事を疑問視する人々、あるいはこれを正当化させる人々がいまだにいることは認識しています。しかしはっきり言いましょう。あの日、アルカイダは3000人近い人々を殺害しました。その犠牲者は、米国およびその他多くの国々の罪のない男女や子どもたちであり、彼らは人を傷つけるようなことは何ひとつしていませんでした。にもかかわらず、アルカイダは、こうした人々を情け容赦なく殺害することを選



び、これを実行したという声明を出し、今も大量殺害の決意を表明しています。彼らは多くの国々に支部を持ち、さらに勢力範囲を拡大しようとしています。こうしたことは、議論されるべき意見ではなく、対処されるべき事実です。

しかし、ここで明確にしておきますが、私たちは米軍をアフガニスタンに維持することを望んではいません。アフガニスタンに軍事基地を設置することも求めてはいません。米国にとって、若い国民を失うことは大きな苦痛です。この紛争を継続することは、費用もかかり政治的にも困難なことです。私たちは、可能な限り多くの米国民を殺害しようと決意した暴力的な過激派が、アフガニスタンに、そして現在ではパキスタンにもいないと確信できるならば、喜んで米兵を1人残らず帰還させます。しかし、まだそうした状況にはなっていません。

米国が46カ国の連合と提携しているのはそのためです。そして、コストがかかるにもかかわらず、米国の決意が弱ま

ることはありません。事実、誰もこうした過激派を容認すべきではありません。彼らは多くの国で人を殺害しています。彼らは、さまざまな宗教の人たちを殺害していますが、中でもイスラム教徒を最も多く殺害しています。彼らの行動は、人間の権利、国家の進歩、そしてイスラム教と相いれないものです。コーランは、罪のない人を1人殺す者は、人類すべてを殺すのと同様である、と教えています。コーランには、1人の人間を救う者は、人類すべてを救うのと同様である、という教えもあります。10億を超える人々の揺るぎない信仰は、少数の人々の狭量な憎悪より、はるかに大きいものです。イスラムは、暴力的過激主義との戦いにおける問題の一部ではなく、平和の推進の重要な一部なのです。

軍事力だけでは、アフガニスタンとパキスタンにおける課題を解決できないことは分かっています。そのために私たちは、今後5年間、毎年15億ドルを投資して、パキスタンと提携し、学校、病院、道路、事業施設を建設すること、そして難民救済に何億ドルもの投資を行うことを計画しています。また、アフガニスタン国民が自国の経済を発展させ、国民が必要とする各種サービスを提供できるようにするために、28億ドルを超える資金を提供します。

次にイラクの問題についてもお話したいと思います。アフガニスタンの場合と異なり、イラク戦争は選択した戦争であり、米国内でも世界各地でも大きな意見の対立を生みました。私は、サダム・フセインの専制がなくなったことで、最終的にはイラク国民にとって状況が改善した、と考えていますが、一方で、イラクにおける出来事は、問題解決に際し、可能な限り外交手段を利用し国際的な合意を築くことの必要性を米国に改めて認識させた、とも考えています。事実、トーマス・ジェファソンは、「われわれの英知はわれわれの力とともに増大し、力は使わなければ使わないほど大きくなるとわれわれに教えてくれることを望む」と述べています。

今日、米国には二重の責任があります。それは、イラクによるより良い未来の構築を援助すること、そしてイラクのことはイラク国民に任せることです。そして私は、イラク国民に対し、米国は基地を設置しようとはしていないこと、また彼らの領土あるいは資源について権利を主張しようしていないことを明確に示しました。イラクの主権はイラクのものです。私が、来年8月までに米軍の戦闘旅団を撤退させることを命令したのはそのためです。私たちが、7月までにイラクの各都市から戦闘部隊を撤退させ、2012年までにイラクから米軍をすべて撤退させるという、イラク民主政府との合意を守るのは、そのためです。私たちは、イラクによる治安部隊の訓練と経済開発を支援します。しかし、私たちが安全な統一されたイラクを支援するのはパートナーとしてであり、後援者として支援することは決してありません。

# —暴力と殺人による 抵抗は間違ったことで あり、成功にはつながり ません。

そして最後に、米国が過激派による暴力を決して容認することができないのと同じように、米国は自らの原則を決して変えたり忘れてたりしてはなりません。9.11は、米国にとって極めて大きなトラウマでした。それによって生じた恐怖と怒りは理解できるものでしたが、場合によっては、それが、私たちの伝統と理想に反した行動につながることもありました。私たちは、方向転換するために具体的な行動を取っています。私は、米国が拷問を使うことを明確に禁止するとともに、来年初めまでにグアンタナモ収容施設を閉鎖するよう命じました。

米国は、各国の主権と法の支配を尊重しつつ、自らを防衛します。そして自らを防衛するに当たり、同様に脅威にさらされているイスラム社会とパートナーシップを組みます。過激派がイスラム社会の中で孤立し、歓迎されなくなるような状況になるのが早ければ早いほど、私たち全員の安全がより早く実現します。

私たちが話し合う必要のある緊張の原因の2つ目は、イスラエル人とパレスチナ人とアラブ世界の間の状況です。

米国とイスラエルの間の強いきずなについてはよく知られています。このきずなは断ち切ることのできないものです。文化的・歴史的なつながりに基づくものであり、また、祖国を求めるユダヤ人の強い願望は、否定することのできない悲劇的な歴史に根差しているとの認識に基づくものです。

ユダヤ人は、何世紀にもわたり世界中で迫害され、ヨーロッパでは反ユダヤ主義が高まった結果、前代未聞のホロコーストが起きました。明日私は、ユダヤ人が第3帝国によってとらわれ、拷問を受け、撃たれ、ガス室で殺された収容所のひとつであったブーヘンバルトを訪問します。ホロコーストでは、今日のイスラエルのユダヤ人の総人口を上回る600万人のユダヤ人が殺害されました。この事実を否定することは根拠のないことであり、無知なことであり、憎むべきことです。イスラエルを破壊すると脅すこと、あるいはユダヤ人に関する下劣な固定観念を繰り返し述べることは、大きな間違いであり、イスラエル人の心に、この最大の苦痛をもたらす記憶をよみがえらせるとともに、この地域の人々が享受すべき平和を妨げるだけです。

一方、イスラム教徒とキリスト教徒を含むパレスチナ人が、祖国を求めて苦しんできたことも否定できません。彼らは、60年以上にもわたり、難民としての苦痛に耐えてきました。その多くは、ヨルダン川西岸、ガザ、およびその近隣地区の難民キャンプで、いまだ手に入れることができずにいる平和で安全な暮らしの実現を待っています。彼らは、占領に伴う大小さまざまな屈辱に毎日耐えています。パレスチナ

人の置かれている状況が耐えがたいものであることに疑いはありません。そして米国は、尊厳と機会と自らの国家を求めるパレスチナ人の正当な願望に背を向けることはありません。

こうして、2つの民族がいずれも正当な願望を持ち、それぞれが苦痛に満ちた歴史を持っているため妥協が難しくなっている中、何十年にもわたり行き詰まりの状態が続いています。パレスチナ人はイスラエル建国によって難民が発生したことを指摘し、イスラエル人は歴史を通じてその国境の内外から常に敵意と攻撃を受けてきたことを指摘して、それぞれ責任を転嫁することは簡単です。しかし、この対立を一方からだけ見るのは、真実に目をつぶることになります。唯一の解決法は、イスラエル人とパレスチナ人がそれぞれ平和で安全に暮らすことのできる2つの国家によって、双方の願望を達成することです。

それはイスラエルの利益になり、パレスチナの利益になり、米国の利益になり、世界の利益になります。従って私は、この作業に必要とされる最大限の忍耐と献身をもって、そうした成果を挙げることができるよう、個人的に努力するつもりです。ロードマップの下で当事者同士が合意した義務は明らかです。今、平和の実現のために、彼らが、そして私たち全員が、それぞれの責任を果たす時が来ています。

パレスチナ人は、暴力を放棄しなければなりません。暴力と殺人による抵抗は間違ったことであり、成功にはつながりません。何世紀もの間、米国の黒人は、奴隷として打ちたたれ、人種隔離の屈辱を味わってきました。しかし、全面的かつ平等な権利を勝ち取ったのは暴力のおかげではありませんでした。それは、米国の建国の中心的な理想を、平和的に、固い決意を持って主張し続けたからでした。これと同じ話を、南アフリカから南アジア、東ヨーロッパからインドネシアまで、各地で聞くことができます。それは、暴力は行き詰まる、という単純な真実の物語です。眠っている子どもたちに向けてロケットを発射したり、老婦人たちの乗っているバスを爆破したりすることは、勇気を表すものでも、力を表すものでもありません。そんなことをすれば、道徳的権威の獲

# 世界に呼びかけるオバマ大統領

カイロから生中継されたバラク・オバマ大統領の講演を聴く各国の人々。オバマ大統領は、米国とイスラム教徒の間の新たな始まりを呼びかけた。

エジプト



シリア



インド



ヨルダン川西岸地区



トルコ



ソマリア



モロッコ



パキスタン



得ではなく、喪失につながります。

今は、パレスチナ人にとって、何を築くことができるかということに注意を集中する時です。パレスチナ自治政府は、市民のニーズに応える制度を備え、統治能力を高めていかなければなりません。ハマスは、確かに一部のパレスチナ人の支持を得ていますが、自らの責任も認識しなければなりません。パレスチナ人の願望の達成に貢献し、パレスチナ人を統一するために、ハマスは、暴力に終止符を打ち、過去の協定を承認し、イスラエルの生存権を承認しなければなりません。

同時にイスラエル人は、イスラエルの生存権が否定できないのと同様、パレスチナの生存権も否定できないことを認めなければなりません。米国は、イスラエルの入植地存続の合法性を承認していません。こうした建設は、過去の合意に違反するものであり、和平達成の努力を損なうものです。これらの入植地建設を中止する時が来ています。

またイスラエルは、パレスチナ人が生活し、働き、自らの社会を発展させることができるようにする、という義務も果たさなければなりません。ガザ地区で継続する人道的危機は、パレスチナ人の家族に大きな打撃を与えるように、イスラエルの安全保障のためにもなりません。ヨルダン川西岸で続く機会の欠如も同様です。パレスチナ人の日常生活で進展が見えることが、和平への道の重要な一部分でなければならず、イスラエルは、そうした進展を可能にするための具体的な措置を取らなければなりません。

そして最後に、アラブ諸国は、アラブ和平構想は重要な第1歩ではあったものの、アラブ諸国の責任の終了を意味するものではないことを認識しなければなりません。アラブとイスラエルの対立が、これ以上、アラブ諸国の国民の注意をその他の問題からそらすために使われるべきではありません。むしろ、パレスチナ人が自分の国家を維持するための制度を設立するのを助け、イスラエルの正当性を承認し、過去にこだわる自滅的な道より前進を選ぶという行動を起こさせるきっかけとならなければなりません。

米国は、平和を追求する人たちに合わせて政策を調整し、イスラエル人、パレスチナ人、およびアラブ人に非公式に語ることを、公式にも語ります。私たちは、平和を強制することはできません。しかし、非公式には、多くのイスラム教徒が、イスラエルが消滅することはないと認識しています。同様に、多くのイスラエル人が、パレスチナ国家の必要性を認めています。今、誰もが真実であると知っていることに基づいて行動する時が来ています。

これまでに、あまりにも多くの涙が流されてきました。あま

りにも多くの血が流されてきました。イスラエルとパレスチナの母親たちが、恐れることなく子どもたちが成長するのを見守ることができる日、3つの偉大な宗教の聖地が、神の意図した平和な場所となる日、エルサレムが、ユダヤ教徒とキリスト教徒とイスラム教徒にとって永遠に続く安全なふるさととなり、モーゼとキリストとモハメッドが共に祈ったというイスラの話のように、アブラハムの子どもたちが皆、平和に交流する場所となる日を目指して努力する責任が、私たち全員にあります。

緊張を生む第3の要因は、核兵器に関する各国の権利と責任をめぐる、私たちの共通の利害です。

この課題は、米国とイラン・イスラム共和国との間の緊張の原因となってきました。長年にわたり、イランは、米国に反対することを自らの立場を明確にする手段のひとつとしてきており、事実、この両国の間には混乱の歴史があります。冷戦のさなかに、米国は、民主的に選出されたイラン政府の転覆に関与しました。イスラム革命以降、イランは、米軍兵士および民間人に対する人質監禁行為や暴力行為に関わってきています。この歴史はよく知られています。私は、過去にとらわれるのではなく、米国は前進する準備ができているということをイランの指導層と国民に明確に伝えました。今問題なのは、イランが何に反対しているかではなく、イランがどのような未来を築きたいのかということです。

何十年も続いた不信を克服することは難しい、ということも私も認識していますが、それでも私たちは、勇気と清廉な心と決意を持って前進します。この2カ国間で話し合うべき課題は多くあるでしょうが、私たちには、相互の尊重に基づいて、前提条件なしで前進する意志があります。しかし、核兵器に関する限り、私たちが重大な局面に達していることは、すべての関係者にとって明らかです。これは、単に米国の利害だけの問題ではありません。この地域と世界全体を極めて危険な道へと導く可能性のある、中東における核兵器開発競争の防止、という問題なのです。

私は、ある兵器について、それを持つ国と持たない国があることに抗議する人々の意見を理解することができます。どの国家が核兵器を持つかということ、ひとつの国家が決めるべきではありません。だからこそ私は、核兵器保有国のない世界を追求するという米国の約束を改めて強く明言したのです。そして、核不拡散条約の下での責任を果たすのであれば、イランを含むすべての国家に、平和的に原子力を利用する権利が与えられるべきです。その約束は核不拡散条約の中核を成しており、この条約を全面的に順守するすべての国のために守られなければなりません。そして私は、この地域のすべての国々が、この目標を共有することができることを期待しています。

—しかし私は、すべての人々が切望しているものがある、と固く信じています。それは、自分の考えを述べ、自国の統治方法に関して意見を述べる権利、法の支配と平等な司法行政への信頼、国民から搾取しない透明な政府、自分の選んだ生き方をする自由です。これらは、米国の考え方であるだけでなく、人権でもあります。

私がお話する第4の課題は、民主主義です。

近年、民主主義の推進をめぐる論争が起きていること、そしてこの論争の多くは、イラク戦争に関連していることは承知しています。ここで明確に申し上げます。いかなる統治制度も、ある国家が他の国家に対して強要することはできませんし、また強要すべきでもありません。

しかしながら、こう申し上げることで、国民の意志を反映する政府の実現に向けての私の熱意が弱まることはありません。どの国家も、それぞれの国民の伝統に根ざした独自の方法で、この原則を実行しています。米国は、誰にとっても最良の道を知っていると言うつもりはありません。これは、米国が、平和的に行われた選挙の結果を選ぶことができるというつもりがないことと同様です。しかし私は、すべての人々が切望しているものがある、と固く信じています。それは、自分の考えを述べ、自国の統治方法に関して意見を述べる権利、法の支配と平等な司法行政への信頼、国民から搾取しない透明な政府、自分の選んだ生き方をする自由です。これらは、米国の考え方であるだけでなく、人権でもあります。ですからこうした権利は、世界中で支持されているのです。

この約束が実現するまでにはまだ紆余(うよ)曲折があるでしょう。しかし、これだけははっきりしています。こうした権利を保護する政府が、結局は、より安定し、成功し、しっかりとした政府になる、ということです。意見を抑圧しても、それを消してしまうことはできません。米国は、たとえ同意できない意見であっても、世界中で平和的・合法的なすべての意見を述べる権利を尊重します。そして私たちは、選挙によ

って選出された平和的な政府が、国民全員を尊重する統治を行うならば、そうした政府をすべて歓迎します。

この最後の点は重要です。なぜなら、権力の座を外れたときだけ民主主義を支持し、いったん権力の座に着くと、他者の権利を容赦なく抑圧する人々もいるからです。従って、統治する場所にかかわらず、人民の、人民による政府は、権力を持つ人々に対して共通の基準を設定します。それは、強制ではなく合意によって権力を維持しなければならない、少数派の権利を尊重し、寛容と歩み寄りの精神で参加しなければならない、自分の政党よりも国民の利益と政治的プロセスの合法的な機能を重視しなければならない、という基準です。これらの要素がなければ、選挙を実施するだけでは真の民主主義は実現しません。

私たちが共に取り組まなければならない第5の課題は、信教の自由です。

イスラムには、誇るべき寛容の伝統があります。それは、宗教裁判の時代のアンダルシアとコルドバの歴史に見ることができます。また私は、子どものころインドネシアで、それを目の当たりにしました。イスラム教徒が大多数を占めるインドネシアで、敬虔(けいけん)なキリスト教徒が自由に礼拝をしていたのです。これこそ、今日私たちに必要な精神です。すべての国の人々が、精神と心と魂の信じる場所に従って、自由に信仰を選び、実践することが可能であるべきです。宗教が繁栄するためにはこうした寛容が不可欠ですが、さまざまな点でそれが妨げられています。

イスラム教徒の一部には、他人の信仰を拒否することで

自らの信仰を評価するという、憂慮すべき傾向があります。レバノンのマロン派であろうと、エジプトのコプト教であろうと、豊かな宗教的多様性は維持しなければなりません。そして、率直に言うならば、スンニ派とシーア派の対立が、特にイラクで悲劇的な暴力に発展している中、イスラム教徒の間でも、こうした断層をなくさなければなりません。

信教の自由は、さまざまな国の国民が共に暮らすために必要な中心的要素です。私たちは常に、信教の自由を守る方法を検討しなければなりません。例えば、米国では、慈善事業への寄付に関する規則によって、イスラム教徒が宗教的義務を果たすことが以前より難しくなっています。そのため私は、米国のイスラム教徒と協力し、彼らが確実にザカートを実行できるように取り組んでいます。

同様に、西側諸国が、イスラム教徒による宗教の自由な実践を妨げないようにすることも重要です。例えば、イスラム教徒の女性の服装に口を挟むようなことです。いかなる宗教に対しても、自由主義にかこつけて敵意を示すようなことがあってはなりません。

実際、信仰は私たちを団結させるべきものです。米国でキリスト教徒、イスラム教徒、そしてユダヤ教徒を団結させる奉仕活動を企画しているのは、そのためです。また私たちが、サウジアラビアのアブドラ国王による宗教間の対話の推進や、文明の同盟におけるトルコのリーダーシップなどを歓迎するのは、そのためです。私たちは、世界各地で対話を宗教間の奉仕活動に発展させ、民族を結ぶ橋が、アフリカにおけるマラリアとの戦いや自然災害後の救助活動など実際の行動につながるようにすることができます。

私がお話したい第6の課題は、女性の権利です。この問題について健全な議論が行われていることは私も認識していますし、この会場の皆さんの反応からも明らかです。私は、髪の毛を覆うことを選ぶ女性は平等に扱われないという、西洋の一部の人たちの考え方は受け入れることができませんが、教育を受けさせてもらえない女性は平等な扱いも受けることができない、と考えます。女性が十分な教育を受けている国がそうでない国と比べて、繁栄する可能性はるかに高いことは、偶然の一致ではありません。

ここで明確にしておきたいのは、女性の平等の問題は、決してイスラムだけの問題ではないということです。トルコ、パキスタン、バングラデシュ、インドネシアなど、イスラム教徒が過半数を占める国で、女性が首脳に選ばれた例があります。一方、米国の暮らしのさまざまな側面で、また世界各国で、女性の平等を求める苦闘が続いています。

私は、私たちの娘たちが、息子たちと全く同様に社会に

貢献できる、と確信しています。男女を問わずすべての人間が自らの可能性を十分に発揮できるようにすることによって、私たちの共通の繁栄を推進することができます。私は、女性が平等であるために男性と同じ道を選ばなければならないとは思いません。私は、伝統的な役割を果たす人生を選ぶ女性たちを尊敬します。しかし、それは女性が自ら選ぶべきものです。だからこそ、米国は、イスラム教徒が過半数を占める国々と提携して、少女たちの識字率向上を支援し、人々の夢の実現に役立つマイクロファイナンスを通じて若い女性の就職を支援します。

最後に、経済開発と経済機会についてお話ししたいと思います。

多くの人たちには、グローバル化が相反する2つの結果をもたらすように見えることを、私は認識しています。インターネットとテレビは、知識と情報をもたらすことができます。一方で、不快な性的描写や低俗な暴力を家庭に持ち込むことがあります。貿易は、新たな富と機会を生む一方で、地域社会に大きな混乱と変化をもたらす可能性があります。米国も含め、どの国でも、こうした変化が恐怖心を呼び起こす可能性があります。つまり、近代化によって、私たちは自らの経済的選択肢、自らの政治、そして最も重要な点として、自らのアイデンティティ、すなわち、私たちが地域社会、家族、伝統、そして信仰で最も大事にしているものに対するコントロールを失うのではないか、という恐怖心です。

しかし私は、人類の前進は否定することができないということも知っています。開発と伝統が相互に矛盾する必要はありません。日本や韓国のような国々は、独自の文化を維持しながら、経済を大きく成長させました。クアラルンプールからドバイに至るイスラム教徒が過半数を占める国々における驚異的な前進についても、同じことが言えます。古代においても現代においても、イスラム社会は、革新と教育の最前線に立ってきました。

これは重要なことです。なぜなら、いかなる開発戦略も、地中から得られるものだけに依存することはできず、また若者が失業しては維持できないからです。多くの湾岸諸国は、石油によって大きな富を築き、その中には、さらに幅広い開発に目を向け始めている国々もあります。しかし、私たちは皆、教育と革新が21世紀の通貨であることを認識しなければなりません。そして、いまだにそうした分野への投資が不足しているイスラム社会があまりにも多すぎます。私は、米国で、このような分野への投資に重点を置いています。そして、これまで米国は、中東地域に関しては石油とガスに注目してきましたが、今は、より幅広い分野での関与を求めています。



教育に関しては、交流制度を拡充し、私の父の米国留学を可能にしたような奨学金制度を増やします。同時に、より多くの米国人がイスラム社会で学ぶことを奨励します。そして、将来有望なイスラム教徒の学生に米国でのインターンシップを紹介し、世界中の先生や子どもたちのためにオンライン学習に投資し、カンザス州の若者がカイロの若者と瞬時にコミュニケーションを取れるように新たなオンライン・ネットワークを構築します。

経済開発に関しては、新たにビジネス・ボランティア部隊を結成し、イスラム教徒が過半数を占める国々の同様の部隊と提携します。また、米国と世界中のイスラム社会の財界指導者、財団、社会起業家のつながりを強化する方法を見つけるために、私は今年、起業サミットを主催します。

科学と技術に関しては、イスラム教徒が過半数を占める国々で技術開発を支援し、アイデアを商品化して雇用創出につなげられるようにするための新たな基金を設立します。また、アフリカ、中東、および東南アジアに科学の「センター・オブ・エクセレンス」を開設し、新たなエネルギー源の開発、グリーン雇用創出、記録のデジタル化、水資源の浄化、新しい作物の栽培などの計画に協力する新たな科学関

連使節を任命します。また、本日私は、イスラム諸国会議機構と協力して、新たなポリオ撲滅活動を世界的な規模で行うことを発表します。さらに、子どもと母親の健康促進を目指して、各地のイスラム社会とのパートナーシップを拡大します。

こうした活動はすべて協力して行われなければなりません。米国民は、人々を支援してより良い生活を送ることができるようにするために、世界中のイスラム社会の市民と政府、地域組織、宗教指導者、そして企業と協力する準備ができています。

今私が挙げたさまざまな課題に取り組むことは容易ではありません。しかし私たちには、私たちの求める世界のために力を合わせる責任があります。それは、過激派が私たちの国民を脅かすことがなくなり、米国の兵士たちが母国に帰還できる世界、イスラエル人とパレスチナ人がそれぞれ自分の国で安全に暮らし、原子力が平和的に利用される世界、政府が国民に奉仕し、神の子すべての権利が尊重される世界です。それが私たちの相互の利益です。それが私たちの求める世界です。しかし、これを実現するには、協力するほかありません。

# — 私たちには、自分の求める世界をつくり出す力がありますが、それは、私たちが、これまでに書かれたことを心に銘記しながら、新たに始める勇気を持ったときに初めて可能となります。

私たちがこの新たな始まりをつくることができるのか疑問に思う人たちが、イスラム教徒にもそれ以外の人たちの中にも大勢いることは承知しています。対立の炎をあおり、前進を妨げようとする人たちもいます。努力は無駄であり、私たちの意見は対立する運命にあり、文明は衝突する運命にあるのだ、と言う人たちもいます。さらに多くの人たちは、真の変革が起きることに懐疑的です。長年の間に蓄積された恐れと不信は、とても大きなものになっています。しかし、過去に縛られることを選んでしまったら、私たちは決して前進することはできません。そして私は、特に、すべての国々の、あらゆる宗教の若者たちにこう伝えたいと思っています。皆さんには、誰にも増して、世界を考え直し、この世界をつくり直す力があるのだ、ということ。

私たちは皆、ごくわずかな時間だけ、この世界を共有しています。問題は、私たちを対立させる事柄に注意を向けてその時間を過ごすのか、それとも、共通点を見つけ出し、子どもたちのために私たちが求める将来に注意を向け、全人類の尊厳を尊重しようとする持続的な努力に専心するのか、ということです。

戦争は終わらせることより始めることの方が容易です。内省するより他者に責任を転嫁する方が簡単です。人との共通点を探すより相違点を見つけることの方が容易です。しかし私たちは、単に容易な道を進むのではなく、正しい道を選ぶべきです。あらゆる宗教の中核にはひとつの教えがあります。それは、己の欲するところを人に施しなさい、という教えです。この真実は、国家や国民を超越するものです。この信条は、新しいものではなく、肌が黒くても白くても

茶色でも関係なく、キリスト教もイスラム教もユダヤ教も関係なく存在するものです。それは、文明の始まりに鼓動を始め、現在も世界中の何十億という人々の心に脈打つ信条です。それは他者に対する信頼であり、私を本日この場に立たせた力でもあります。

私たちには、自分の求める世界をつくり出す力がありますが、それは、私たちが、これまでに書かれたことを心に銘記しながら、新たに始める勇気を持ったときに初めて可能となります。

コーランは、「人類よ。われわれは人類に男性と女性を創造し、国家と部族をつくり、お互いに理解することができるようにした」と教えています。

タルムードは、「トーラ全体は、平和の促進を目的としている」と教えています。

聖書は、「平和を実現する人々は幸いである。彼らは神の子と呼ばれるからである」と教えています。

世界の人々は、共に平和に暮らすことが可能です。それが神の思い描いた人々の姿であることを私たちは知っています。それが、地球上での私たちの務めとならなければなりません。

ありがとうございました。皆さんに神の平和がもたらされますように。どうもありがとうございました。